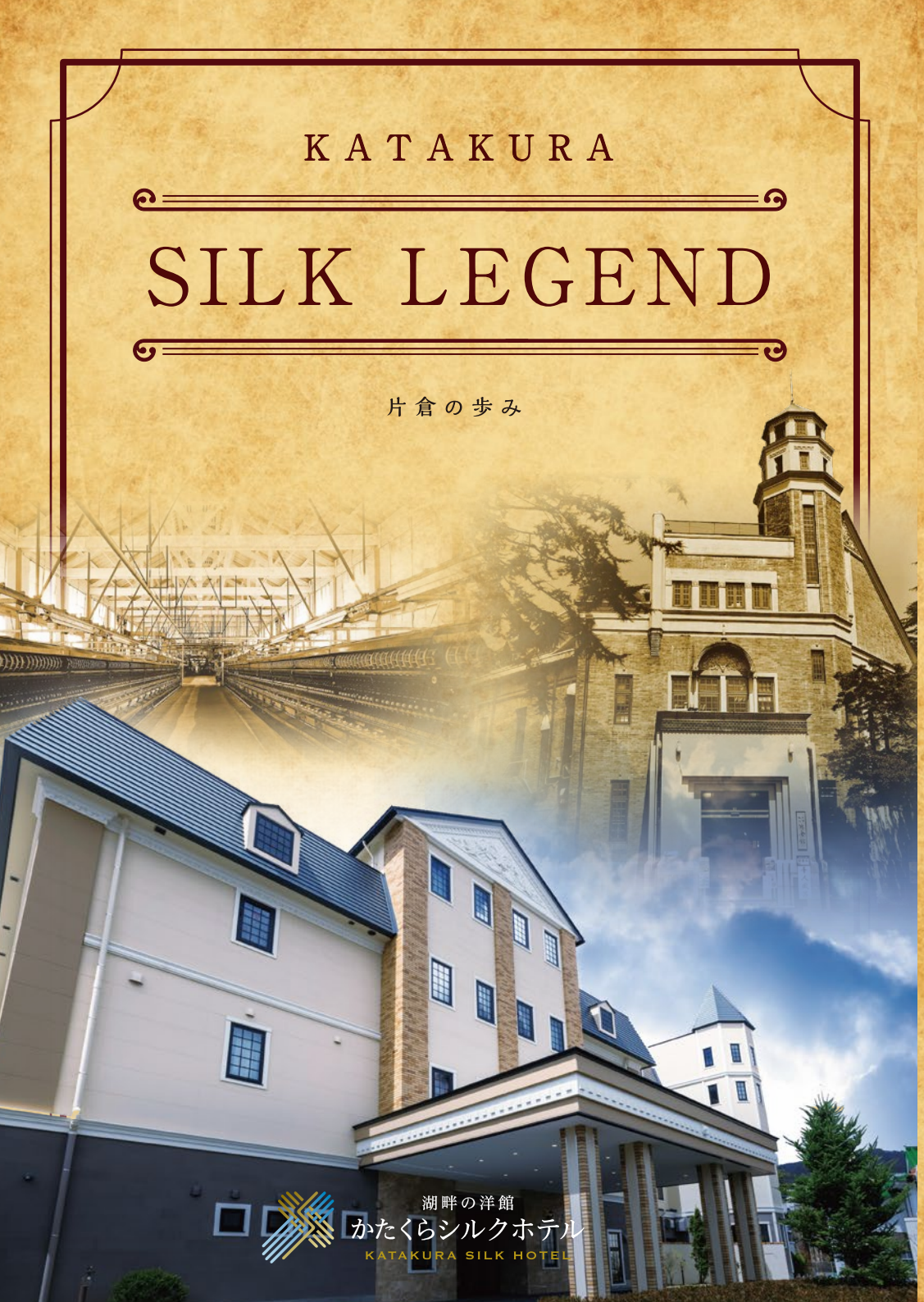
KATAKURA

SILK LEGEND

片倉の歩み



KATAKURA SILK HOTEL

片倉興産株式会社
〒104-0044 東京都中央区明石町6-4

この発展は、日本の国土と国民からの恩恵に他ならない。

この度は当館をご利用いただき誠にありがとうございます。

「かたくらシルクホテル」の歴史は今から百数十年前の明治6年に片倉市助が長男兼太郎、次男光治と自宅で10人式座繰製糸を始めたときに端を発します。

明治28年には本家、兄弟の新家、今井、いとこの新宅、林の五家で片倉組を設立、多岐の事業を手掛け、やがて財閥を形成するに到りました。

一族の基を築いてから百年以上私たちは利益の国土への還元を計り、多くの社会貢献事業にも力を注ぎました。そうした先人たちの思い、おもてなしの心が令和という新時代にまた大きく花開き「かたくらシルクホテル」の開業を果たすことができました。

当館二階には「歴史ギャラリー」を開設し先人たちのさまざまな足跡を展示させていただきました。

私たちは、片倉家が辿ってきた長い歴史を振り返ることでどれほど時代が移ろうとも変わらないお客様お一人おひとりへの思いを新たにします。

信州諏訪湖の旅を心ゆくまでお楽しみいただけますように、とつねに心に念じながら

今日も皆様をお迎えいたします。

片倉の歩み

1849年（嘉永2年）
片倉兼太郎（初代）誕生

1854年（嘉永7年）
日米和親条約調印

1872年（明治5年）
明治政府が群馬に富岡製糸場を開業

1873年（明治6年）
現在の長野県岡谷市で製糸業開始
父市助と自宅にて
「10人式の座繰製糸」

1895年（明治28年）
片倉組を設立
日露戦争

1904年（明治37年）
今井五介（初代片倉兼太郎の弟）
松本商業会議所初代会頭、
松本電灯（現在の中部電力）社長就任

1909年（明治42年）
第一次世界大戦
片倉一族の今井五介、信濃鉄道（現・JR大糸線）社長就任、

1914年（大正3年）
私立片倉尋常小学校（現在の岡谷市立川岸小学校）を開校
シルクエンペラーと呼ばれた
二代片倉兼太郎（初代片倉兼太郎の弟）が
片倉組を株式会社に改組し
社長就任。海外でも製糸事業を展開

1917年（大正6年）
経営難の「私立松本戊戌学会」を支援し、
「（財）私立松本商業学校（現在の松商学園高等学校）」承継

1919年（大正8年）
社名を片倉製糸紡績株式会社とし、
全国の総輸出額の約1割を一社で占める
昭和初期のピーク時には日本の輸出の4割を
シルクが占め、片倉製糸紡績株式会社の
シェアはそのうちの2割にも

1920年（大正9年）
製糸業から不動産、倉庫、保険その他へ
事業展開　五家の子孫である
13家からなる財閥を形成
80数社のコンツェルンに

1922年（大正11年）
日本の近代化のために
二代兼太郎が10ヶ月間の海外視察へ
自社の社員だけでなく
諏訪の人々にも利益を還元したいと願う

1923年（大正12年）
大正10年に片倉傘下となっていた
福島紡織株式会社を改組し、
大正12年に二代兼太郎と初代甥の
三平が日東紡績株式会社を設立。
後に十大紡の一つとなる

1928年（昭和3年）
公共の福利厚生施設として建設した
温泉施設「片倉館」開業
竣工式に200人を超える参列者
金融恐慌の混乱期にも片倉館の建設を推し進める
隣接する敷地内に片倉家別邸「迎賓館」は皇室の方や文人墨客、
渋沢栄一氏などの財界人が宿泊
地域の人たちの福利厚生のための公衆用に本邦初のクアハウス開業

1935年（昭和10年）
昭和初期からは神社等への寄進も
諏訪大社上社前宮の鳥居、本宮の玉垣
皇紀2600年（昭和15年）には靖国神社
鳥居と狛犬を奉納
日米関係の悪化で対米向け製糸輸出止まる

1939年（昭和14年）
第二次世界大戦勃発
富岡製糸場を合併　片倉製糸の
積極経営は戦時経済が強まるまで続く
片倉家別邸 数寄屋造りの離れ
「菊の間」が完成

1941年（昭和16年）
三代片倉兼太郎（二代兼太郎の長男）を
中心に松本女子実業学校
（後の松本松南高等学校）を開校

1943年（昭和18年）
真珠湾攻撃　太平洋戦争開戦
12月の会議で片倉組より飛行機を二機
寄贈することを決定
懐古館（現在の諏訪市美術館）が開設される

1945年（昭和20年）
終戦
太平洋戦争の終結と同時にGHQによる財閥解体

1948年（昭和23年）
諏訪湖ホテル（後のかたくら諏訪湖ホテル）開業

1952年（昭和27年）
片倉合名会社を片倉興産株式会社に改称

1964年（昭和39年）
皇太子殿下ご夫妻ご宿泊

1978年（昭和53年）
長野やまびこ国体、天皇皇后両陛下ご宿泊
皇太子殿下ご夫妻ご宿泊

1990年（平成2年）
「かたくら諏訪湖ホテル」に名称変更

1992年（平成4年）
天皇皇后両陛下ご宿泊

2007年（平成19年）
経済産業省「近代化産業遺産群」に認定
岡谷市にある「旧片倉組事務所」など15件、
および諏訪地域の製糸関連遺産として
「片倉館」が登録される

2011年（平成23年）
かたくら諏訪湖ホテル「菊の間」
および「迎賓館」が国登録有形文化財登録
同時に「片倉館」が国指定重要文化財登録

2014年（平成26年）
片倉館が映画「テルマエ・ロマエ」の撮影場所に

2021年（令和3年）
4月、「かたくらシルクホテル」オープン

片倉のルーツ

諏訪大社下社秋宮若宮社に祀られる 片倉辺命

片倉家系図には諏訪大社下社秋宮若宮社に祀られる片倉辺命（かたくらべのみこと）から初代兼太郎まで、六十代の祖先が記載されています。

なかでも十四世紀から十五世紀頃に藤沢村片倉（現在の伊那市高遠町藤沢）に居住し、片倉姓を名乗り、後の武田軍の侵攻により深澤（みさわ）に逃れ定住したと記載があり、この辺りが一族の遠祖ではないかと推定されています。

断片的に「片倉の遠祖は豪農だった」とか、「里正（名主）であった」などの話は聞きますが、それを裏付ける資料として、天明８年（１７８８年）の検地帳に「〃片倉長左衛門〃田畑屋敷、合計二町五反五畝（約7,650坪）」とあり、当時としては相当な土地と地位を有していたと考えられます。

諏訪地域の蚕糸・製糸

諏訪地域では江戸時代後期には蚕飼、生糸生産がすでに行われており、安政６年（１８５９年）以降、横浜に生糸を出荷しています。

片倉家で10人式座繰製糸が始まった明治６年の町村誌には、諏訪湖周辺の平坦部には物産として繭と生糸が記録され、長地村、平野村、上諏訪の桑売買が記録に残っています。

明治10年代になると、平坦部を中心に製糸業地帯が形成され、養蚕はより盛んとなり、明治20年頃には政府の富国強兵策の奨励もあり、養蚕農家は増大し、田畑を桑畑に変え、養蚕主体の農家が増加しました。

明治20年代前半には共同結社が多く設立され、後半には器械製糸が発展、独立経営する製糸会社が現れ始めました。従業員数も急速に増大し、工女の争奪が激化します。

初代 片倉兼太郎

一大コンツェルンを形成した片倉組は家族で創業した繭糸の製糸業から始まりました

片倉の歴史を語るにあたって、まず今からおよそ150年前、明治6年（1873年）に思いを馳せなければなりません。明治6年といえば西郷隆盛が参議を辞職、また岩倉具視を全権大使としてアメリカ・ヨーロッパ諸国を巡った岩倉使節団が帰国した年です。

片倉市助夫妻

片倉光治

その年、信濃国諏訪郡三沢村（現在の岡谷市川岸）の豪農だった片倉市助が自宅において長男・兼太郎（初代片倉兼太郎）、次男・光治と10人式座繰製糸を始めます。

諏訪地域では江戸時代の後期には蚕飼（こがい）、生糸生産が既に行われており、安政6年（1859年）以降、横浜に生糸を出荷していました。養蚕業は蚕（かいこ）を飼ってその繭から生糸（絹）を作る産業であり、明治6年の諏訪町村誌には蚕の餌となる桑の葉がおよそ8、500貫売買されたとあります。しかしまだ明治初期の製糸業者は規模が小さく、個人では投機性の高い横浜への販売は困難でした。

それから5年後の明治11年には32人繰り洋式器械製糸工場〝垣外（かいと）製糸〟工場を新設。その後、地域の同業者と共同出荷組合〝深澤社（みさわしゃ）〟、共同販売会社〝開明社〟を組織するなど次々と事業を拡大していきます。開明社は繭の共同購入を行い、品質統一を図るため、共同揚げ返し場を天竜河畔に設けました。こうした共同結社時代が明治20年代前半

垣外製糸場

まで続き、後半には器械製糸が発展、拡大し結社を分解、独立経営をする製糸会社が現れ始めます。

片倉では明治23年に郡外第一号工場として、繭と水の条件に恵まれる松本に、「片倉松本製糸所」を新設しました。

明治26年には中国から繭を購入。上海で製糸業にも着手。明治27年、初代片倉兼太郎が360釜の工場「三全社」を設立、片倉組とし、一族経営の製糸会社を発足しました。その年には官民を問わず全国一の生産量となりました。

初代片倉兼太郎は創業以来、洋式器械製糸工場の開設など事業を拡大し、明治28年に片倉組を設立。片倉佐一(二代片倉兼太郎)をはじめとする一族の一致協力のもと、片倉財閥の基礎を築きました。

明治27～28年の日清戦争での日本の勝利は国際的評価を高め、経済発展にも大きく貢献しました。諏訪郡製糸工場釜数は明治25年の8、420釜から、明治35年には1.6倍の13、383釜にも増加しました。同時に動力も、水力から石炭へと変換し、常磐炭鉱のある東北や関東への進

開明社

三全社

出が計画され、明治31年には二代兼太郎、小口伝吉が東京千駄ヶ谷に製糸工場を設立しました。

また、片倉傘下となっていた福島紡織株式会社を改組し、大正12年に日東紡績株式会社を設立しました。

大正14年には多くの合併、新設を経て国内(1府24県)に58、海外に青島(チンタオ)をはじめとして4の工場を持つに至り、全国生糸生産の20%を占めました。また同年には、アメリカ・ニューヨークに支店を設けました。当時、日本全国の総輸出金額の5%を片倉一社で占めたと言われています。

片倉の事業の主力は製糸に置かれていましたが、農林をはじめ、肥料、生保、損保、紡績、鉄道、電力、石油、ステンレス、鉱山など多岐にわたる事業を展開し、コンツェルンに発展しました。

昭和15年、片倉の発展はピークに達し、資本金6,650万円。製糸業第2位の郡是製糸の2,660万円を大きく引き離しました。

こうした成功を背景に、片倉組は社会貢献事業にも大きな足跡を残していきました。

片倉の発展は、日本の国土と国民からの恩恵にほかならない、と利益の国土への還元、数多くの社会貢献に力を注ぎました。

初代片倉兼太郎は「製糸は国の産業の中心であり、産業の振興には輸送の合理化は不可欠である」として、中央東線「富士見～岡谷間」の開通に奔走、また「塩尻～岡谷間」鉄索（ケーブル）の架設や信濃鉄道（現・ＪＲ大糸線）の実現など鉄道事業にも深く関わります。

また60kwの発電力を持つ松本電灯より資金面、経営面の援助を乞われた片倉組は、一族の今井五介を社長とし、電力需要の高まりを受け大正11年中央電気株式会社を設立しました。

明治42年には器械製糸工場の従業員の健康管理が大きな関心事となり、共同出資で従業員とその家族及び一般人を対象とした診療所「製糸共同病院」を設立、これは現在の岡谷市民病院として、今でも周辺の方々の健康に貢献しています。

鶴峯公園

旧片倉組事務所

二代 片倉兼太郎

二代兼太郎の「北中南米～欧州への視察旅行」から芽生えた公共の福利厚生施設、慰安休養施設の建設

二代片倉兼太郎は初代兼太郎の末弟。養嗣子となり一族の中心として家業の発展に尽くし、各地の製糸会社を積極的に吸収合併し規模を拡大、世界へも目を向けて製糸の輸出を本格化させ、多くの外貨を稼ぐなど日本の近代化の立役者となりました。

片倉館の契機となった二代兼太郎の北中南米～欧州視察旅行

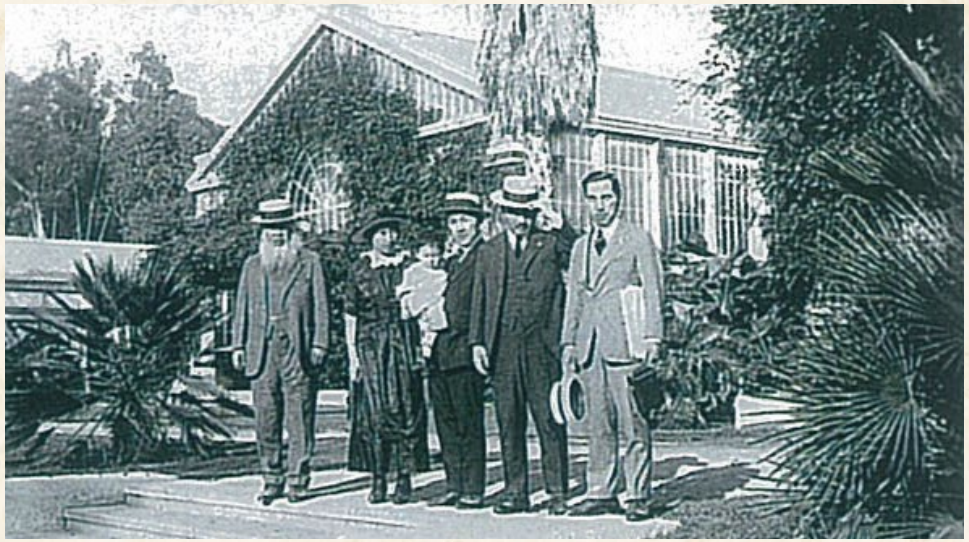
日本の近代化を目的に二代兼太郎は大正11年7月から10ヶ月間、約20万kmに及ぶ北中南米～欧州視察旅行に出ます。その際に「片倉館」設立のため立ち寄ったチェコのカルルスバーグの立派な施設が忘れられず、帰国後「欧米諸国の農村には慰安、保養の施設が在り、我が国では金持ちは温泉保養できるが、諏訪の村民はそのようなことはできない。上諏訪の湖畔には幸い温泉が湧くから、浴場を作って農村の人たちに公開したい」と提案しました。自社の社員はもとより、地元の人たちにも利益を還元したいという願いがやがて実を結び、昭和3年に「片倉館」が竣工しました。約3,000坪の敷地に浴場棟と木造館を持ち、浴場棟には大浴槽や高さ約14mの湯滝、サウナやステンドグラス等の超近代的な設備が備えられ、木造館には150畳の大広間をはじめ、5つの会場と3つの家族風呂がありました。片倉館は温泉、社交、娯楽、文化向上のための施設として今でも多くの人々に利用されています。

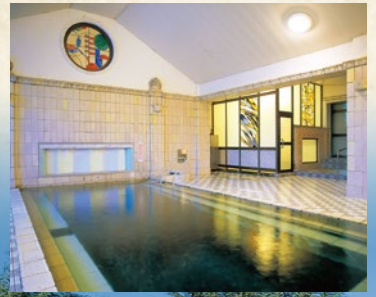
いまからおよそ100年前、大正11年に二代兼太郎は10ヶ月に及ぶ海外視察旅行に出ました。当時、日本～イギリス間の渡航には約40～50日を要したと言われています。また旅券を申請すると、警察から財産調査が入り、旅行の理由が日本政府から認められない限りはパスポートがおりない時代でした。

片倉館開業

片倉館は平成23年に国の重要文化財に指定されました。片倉館の意匠は明治から昭和初期に建築界で鬼才と謳われた森山松之助の手による設計で、日本における洋風建築の独自性を確立した建物として、また当時の日本近代洋風建築の粋を結集した傑作として高い評価を受けています。

片倉館の壁面に熊の顔のレリーフが施されているのをご存知でしょうか？425点にものぼる森山松





之助の資料にも熊に関した記載は見当たりません。明確な論拠はありませんが、二代兼太郎が片倉館設立の動機を得た欧州視察にその理由を読み取った研究家がいます。二代兼太郎が慰安休養施設を視察したのはチェコのカルルスバーグ訪問時でした。チェコには世界一美しいと言われる町チェスキークルムロフ（現在は世界遺産に認定）があり、当地の世界的に有名な城郭であるチェスキークルムロフ城が片倉館設計のアイディアの源泉でなかったか。実はその城の守護神が「熊」であったということが判明しました。遠い異国との結びつきを、この一つの意匠にみることができます。

今井五介

（初代片倉兼太郎弟）

松本商業会議所初代会頭

今井五介は片倉市助の三男。初代兼太郎の実弟です。明治10年に今井太郎の養子となり、明治19年、農商務省の蚕病試験場に入り、渡米を経て片倉組・松本製糸所長となります。

明治42年には松本商業会議所の初代会頭、松本電灯社長に就任します。大正3年には信濃鉄道の社長に就任し、信濃大町駅から松本駅間を開通させています。また大正7年には貴族院議員に選出されました。

経営難に陥っていた「私立松本戊戌学会」を一族が支援し、同8年に「（財）私立松本商業学校（現在の松商学園高等学校）」として再出発させています。

同9年には片倉製糸紡績株式会社の設立にあたって副社長に就任。後に社長になっています。

社会貢献の歩み

利益の国土への還元

本誌12ページの初代兼太郎の功績でも触れましたが、片倉は育英事業にも心を砕き、多くの社会貢献を果たしています。

電気・鉄道・病院の発展に寄与した初代兼太郎はまた、製糸の生産に従事する者に義務教育未了者が多いことを憂え、公認の私立小学校開校を計画、現在の鶴峰公園に校舎を建てました。竣工前に初代は逝去し、二代兼太郎が志を継ぎ、大正6年に竣工、「片倉尋常小学校」が誕生しました。東京で高等教育を受けようとする青年たちのためには「育英財団明道館」を設立、神田駿河台に600坪余の土地を購入し、寄宿舎を設立しました。

また個人によって開かれた私塾戊戌学会は明治35年に私立松本戊戌商業学校となりますが、経営困難となり、片倉一族への援助の要請がありました。同族はこれを受け、当時松本商議所（後の商工会議所）会頭をしていた今井五介を中心に援助を行い大正8年（財）私立松本商業学校として発足します。

このほかにも片倉製糸の工場があった埼玉県大宮市に（財）片倉学園高等学校（現在の県立大宮高等学校）、全国各地の工場所在地の小学校に対する寄付や、小学校設立の支援を行いました。

神社への寄進

片倉一族はまた信仰心、先祖を敬う心が篤く、数々の神社仏閣への寄進を行ってきました。

諏訪大社下社秋宮の唐金鳥居の中ほどには「三澤村片倉嘉右衛門」の名前が鋳造されており、文化12年（1815年）、鳥居を作る際に黄金5枚を寄進したことを伝えています。

諏訪大社下社秋宮境内の社殿改築記念碑や上社前宮入口の鳥居、玉垣にも一族の名が刻まれています。

また靖国神社の側面入口（靖国通り）の鳥居と狛犬も一族によって寄贈されたものです。

このようにシルクエンペラーとまで呼ばれた片倉は常に日本、そして郷土の文化、教育、福祉の向上を考え、利益の一部の社会への還元に努めました。

三代 片倉兼太郎

「売らない、貸さない、壊さない」

富岡製糸場を守り抜いた片倉工業株式会社

三代片倉兼太郎は二代兼太郎の長男として生まれ、若くして片倉組の経営に参画。片倉財閥の多角化を進めるなど業容を発展させました。そして昭和14年、片倉家の悲願でもあった旧官営「富岡製糸場」の獲得に成功します。

群馬県の富岡製糸場は明治5年(1872年)つまり初代片倉兼太郎が自宅で10人式座繰製糸を始める前年に操業。フランス人技師ポール・ブリュナの指導のもと、西欧技術と在来技術を結集した建物が建てられ、繰糸器などはフランスから輸入されました。富岡製糸場は明治26年に三井家に払い下げられ、明治35年原合名会社に譲渡、昭和14年に片倉工業株式会社に合併されます。第二次世界大戦後は全面的に自動繰糸機を導入し、生産効率を大きく向上させ、高品質な生糸を大量に生産しました。富岡製糸場はなんと昭和62年まで操業を続けました。その後も片倉の「売らない、貸さない、壊さない」の3原則のもと維持管理され、平成17年に富岡市に建物等を寄贈。後年2014年の富岡製糸場世界遺産登録へとつながりました。

その富岡製糸場を獲得した同年、三代兼太郎は貴族院議員に選出されました。

昭和15年には地元の女学校教頭数名が、私立高等女学校設立の構想を抱き、その当時、県で唯一の私立商業学校を経営していた片倉一族に支援を求め、三代片倉兼太郎を中心に昭和16年(財)松本女子実業学校を松本市に開校。昭和20年「松本松南高等学校」としてスタートしました。しかし、昭和22年1月15日志半ばにして62歳でこの世を去りました。

戦中戦後をともに歩む。おもてなしの思いを抱いて

昭和10年、日米関係の悪化で対米向けの製糸輸出が止まりました。

昭和14年、第二次世界大戦勃発。16年真珠湾攻撃にて太平洋戦争の開戦。

昭和18年には片倉館と同じ敷地内に、諏訪の歴史資料や蚕糸関係資料などを展示する「懐古館」を建設しました。室内外ともにコンクリート造り風の大壁で、全体を和風の意匠にまとめ、洋風意匠の片倉館と相まって、諏訪湖畔に独特の景観を与え続けています。懐古館は戦後、諏訪地方在住の芸術家や文化人が借り受け、諏訪美術館としました。その後、諏訪市に寄贈され、昭和31年には長野県初の公立美術館である「諏訪市美術館」となりました。

苦難の戦時下を過ごし、昭和20年終戦。太平洋戦争終結と同時にGHQ(連合国軍最高司令官総司令部)による占領政策の一つ、財閥解体が始まります。これは経済民主化政策の一環であり、全国のおよそ80以上の財閥が解体されることとなりました。片倉財閥もまた解体となりますが、「片倉」の系統と思いは四代、五代と受け継がれ、今に至ります。

諏訪湖ホテル開業

昭和23年、諏訪湖ホテル(後の「かたくら諏訪湖ホテル」)が開業。片倉家の別邸として、片倉館の敷地内に昭和3年に竣工した「迎賓館」と昭和14年に完成した「菊の間」を、現在の場所に移築しました。ともに片倉家の別邸として建てられたもので、設計は片倉館と同じく森山松之助の手によります。

「迎賓館」は外観をスパニッシュ風の意匠でまとめ、一階の内部を洋室、二階を和室とし、昭和初期の別邸建築の傑作と呼ばれました。

「菊の間」は座敷を数寄屋造で統一、全体に装飾を抑え、洗練された意匠とモダンな感覚を踏まえた伝統建築となっています。平成23年には菊の間および迎賓館が国登録有形文化財となりました。

当ホテルは諏訪湖を代表するおもてなしホテルとして天皇皇后両陛下を始め多くの来賓のご宿泊を賜ってきました。

昭和・平成のできごと

昭和39年には諏訪湖ホテルに皇太子殿下ご夫妻のご宿泊を賜りました。昭和53年にも長野やまびこ国体にご来臨された天皇皇后両陛下をお迎えしています。平成4年には天皇皇后両陛下のご宿泊を賜りました。

このように諏訪湖ホテルは皇族の方々をはじめ、多くの来賓のご宿泊を賜り、諏訪湖を代表するホテルとして今日まで愛されてきました。

平成19年には経済産業省「近代化産業遺産群」として「片倉館」をはじめ、岡谷市にある「旧片倉組事務所」など15件、および諏訪地域の製糸関連遺産が登録されました。また平成23年には諏訪湖ホテル「菊の間」と「迎賓館」が国登録有形文化財に、同時に「片倉館」が国指定重要文化財に登録されました。「片倉館」はその時代を感じさせる美しい佇まいが話題となり、人気映画「テルマエ・ロマエ」のロケ地としても有名になりました。

そして令和3年(2021年)、「かたくらシルクホテル」がオープンしました。

製糸業を生業(なりわい)とし、財をなした片倉はその富を自社一族だけでなく、地域の発展にも広く活用しました。昭和3年、片倉館が開業した頃には5㎞離れた対岸の岡谷から慰安に製糸工場の女子従業員の皆さんが船で訪れたこともありました。一族の長は「この発展は、日本の国土と国民からの恩恵にほかならない」と常々語り、この思いをいまに繋いで、これからも新しいホテルを通して、地域に愛していただけるおもてなしと環境づくりに邁進していきます。地域の皆様、そして諏訪湖を訪れる皆様に心なごむ癒しのステージとなれますように。

歴史を今に伝える文化遺産群

日本の近代化や絹産業の技術革新などに多大な貢献を果たした片倉家。シルクエンペラーと称えられたその長い歴史と実績が育んだ建築物の数々は令和の世になっても、そのかがやきを失うことなく、美しい佇まいと絢爛な歴史を今に伝えています。

かたくらシルクホテルがある諏訪市はもとより、諏訪湖対岸の岡谷市には「初代片倉兼太郎生家」や「旧片倉組事務所」、中部一と言われるツツジの名所としても有名な「鶴峯公園」に「初代片倉兼太郎像」がたっています。

旅の思い出に、当ホテルを拠点として、近代日本を支えた片倉家ゆかりの地を訪ねてみてはいかがですか。

[旧片倉組本部事務所]

長野県岡谷市。名実ともに日本最大の製糸工場だった片倉組の本部事務所。明治43年に片倉組発祥の地・垣外製糸場内に本部事務所として建築されました。戦後は中央印刷株式会社として引き継がれ、今もなお往時の姿のまま残っています。平成8年には国の登録有形文化財に認定されました。

[別邸特別室離れ「菊の間」]

昭和14年に片倉家別邸として、片倉館に隣接する敷地内に建てられました。設計会社は片倉館と同じく、大正から昭和・戦前を代表する建築家の一人である森山松之助の手によるものです。当初は諏訪湖に面して建っていましたが昭和23年「かたくら諏訪湖ホテル」建築の際に、現在の場所に移築。平成23年10月28日、国登録有形文化財に登録されました。

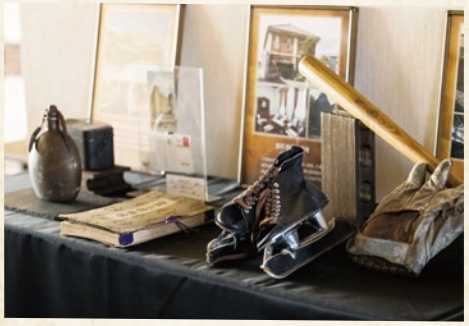
[旧片倉家別邸「迎賓館」]

片倉家別邸にふさわしいヴィクトリア調の様式にシンプルさを加えた大正ロマンを偲ばせる建物です。昭和23年に諏訪湖ホテル開業の際に、「菊の間」とともに、そのままホテルとして使用され、平成2年に現在の場所に移築されました。家具や調度品もお客様のおもてなしを考えた味わいある品々を用意しています。皇室の方々や多くの貴族の方々もここでしばしばお食事を楽しまれました。

[片倉館]

上諏訪温泉のシンボルとして長く愛されているレトロな洋風建築、片倉館。重要文化財の温泉施設は貴重で、窓、切妻、レリーフ、ステンドグラス等各時代、各国の様式が巧みに採り入れられた佇まいが美しく、多くの旅人を今も魅了しています。千人風呂と呼ばれる大浴場は珍しい立ち湯。平成23年に会館、浴場、渡廊下の三棟が国指定重要文化財に。

歴史ギャラリーの品

かたくらシルクホテル二階ラウンジには長い片倉家の歴史に触れることができる、歴史ギャラリーがあります。

一族に伝えられた兼太郎が愛用していた品々や書物、絵画が展示され、片倉家・製糸業の歴史を見ることができます。ぜひ足をお運びいただき、ごゆっくりとお過ごしいただければと思います。